

第6号 2009年6月1日発行

～もくじ～

- p1 巻頭言『新しいことを学び続けるとこと』（長崎和則）
 - p 2 『S・コラボ活動報告』 & 『S・コラボメンバー紹介』
 - p 3 『第5回講演会報告』
 - p 4 S・コラム『五つの訓示』（今村嘉治）
 - p 5 S・コラム 『新メンバーとして』（数野幸子）
- p 6 S・コラム『60kmの道のりの中で』（堀内香奈）
 - p 8 『私の日々』（守屋智加）
- p 9 S・コラム『安心で安全な人・居場所』（重原直子）
 - p 10 S・コラム『虐待とネグレクト』（福井一仁）
 - p 11 『私の電車日記』
 - p 12 『ブギウギムービー』
 - p 13 『かがくのじかん』
 - p 14 『コミックノススメ』
- p 15 『フォークソングのススメ』
 - p 17 『ブギウギムービー2』
 - p 18 『おじさんの青春シリーズ ロック魂』
- p 19 『第6回講演会のお知らせ』 & 書籍紹介
 - p 21 代表よりヒトコト 『ごあいさつ』（豊田尚子）
- p 22 『今後の予定』 & 編集後記

「新しいことを学び続けること」

長崎和則（S・コラボ顧問／川崎医療福祉大学教員）

脳科学者の茂木健一郎は、閃きや気づきの瞬間に「あっ！」とを感じる体験を「アハ体験」として紹介していることは、皆さんよくご存じのことだと思います。新しい研究の結果、脳について、これまでには分からなかったことがずいぶん分かるようになってきているようです。

精神障害については、クレペリンが内因性精神病をその病像と経過から早発性痴呆と躁うつ病という二大疾患群に分類したのは1899年ですね。それから110年が経過し、さまざまな研究が行われて、精神病の分類も大きな変化が生じているようです。例えば、これまでにはできなかった画像診断¹もできるようになって、心の病気といっても、脳内伝達物質であるセロトニン、ノルアドレナリン、アドレナリン、ヒスタミン、ドーパミンなどの脳の中の神経伝達物質の異常が関係している病気であるというふうに言われています。また、病名が異なっても同じような症状もあるようで、例えば以前には統合失調症であると判断されていた病気が、実はアスペルガー障害であったり、双極性障害の躁状態であったりすることもあるとのことなのです。

人は自分が学び、経験してきたことを基準にして、新しく出会うことを判断しようとすると言われてしています。そのほうが大きなエネルギーを使うこともなく、安心ですからね。実際、そのような対応をしても困ることがなければ、そのまま変化することもないですね。経験はとても貴重で重要ではありますが、それだけではいけない。古いことは、間違っていることもあるのです。もちろん、新しいことがすべて正しいわけではないでしょうが、新しいことを学ばず、古い知識だけで対応しているはその古い状態に留まってしまわないのでしょうか。頭が固く、頑固者といわれる状態でしょうか。

新しいことを学び続けるということは、時間も必要でしょうし、根気も必要です。「もう、面倒くさい。ええやん（いいじゃないの。いいじゃん）」ということになりそうな自分がいますが、そうは言ってもらえない。そう思うのです。

私たちが出会い、支援を必要としている人にとって、よりよい支援ができるかどうかはとても重要です。それを考えずに、「ええやん」と適当なことをしては申し訳が立ちません。そんなふうに考えますが、皆さんはどう思われるのでしょうか。

新年度が始まり、2ヶ月が過ぎました。新しい気持ちで、こんなふうに考えて、いくつになっても新しいことを知り、新しいことに取り組みチャレンジする気持ちを持ち続けたいと思うところです。

ところで、あなたは今年、何か新しいことに取り組んでいますか？
そう問われて、困らないような自分でいたいなあ。

¹ 陽電子放出断層撮影（PET）などの脳機能画像のことです。

S・コラボ 2月～4月 活動報告

新緑の季節となりました。

順調に月1回事例検討を行っています。

2月～5月のS・コラボ活動報告です。

2月 7日	第5回講演会 西澤 哲氏
9日	事例検討
23日	会合
3月 9日	事例検討
23日	会合
4月 13日	会合
27日	中止
5月 11日	事例検討
5月 25日	事例検討

S・コラボメンバー紹介

現在活動中のメンバーです。

少しずつですがメンバーが増えてきました。



* 顧問 *

長崎和則 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科 教授

* メンバー * (五十音順)

今村嘉治 広島保護観察所 福山駐在官事務所 保護観察官

数野幸子 精神障害者小規模作業所 遊心工房スタッフ

重原直子 自由館スタッフ 遊心工房非常勤スタッフ

豊田尚子 精神保健福祉士 臨床心理士 S・コラボ代表世話人

福井一仁 NPO 法人家族サポートネットワーク広島 理事長

自由館代表 遊心工房所長

堀内香奈 福山友愛病院 精神保健福祉士

《新メンバー》 2009年4月～

守屋智加 精神障害者小規模作業所 遊心工房スタッフ

S・コラボ 第5回講演会報告

2009年2月7日(土)ローズコムにて、山梨県立大学人間福祉学部西澤哲氏をお迎えし、「『子どもの虐待』を一緒に考えてみませんか?～家族を支える取り組み～」と題して講演会を開催しました。当日は70名余りの方々にお集まりいただきました。ご参加下さった皆様誠にありがとうございました。

◎皆さんからたくさんのご感想をいただきました。一部ですがご紹介させていただきます。

●子ども虐待防止学会での学びとこの講演会を通じて、子ども虐待の背景は家庭全体、そして社会全体があるということが分かってきました。子どもが「不快」を抜け出せるような支援を考える力をつけていくために、今後もいろいろな学びを深めていきたいと思いました。

虐待について詳しく知ることができ考えさせられました。また、いろんな講演会をS・コラボでも企画してください。ありがとうございました。

●虐待のことについて関心があったので、すごく勉強になりました。虐待を受け、基本的不信感を持った子どもが安心をもてるようになることはあるのか、また、そのためにはどのような支援をしたらいいのかをしりたいと思います。トラウマは、なかなかとれる事がないと思うのですが、乗り越えていくためには本人・支援者はどうしたらいいのかを考えていきたいです。ありがとうございました。

●体に受ける暴力だけでなく、DV家庭に育った子ども(暴力を見て育った)の精神的なダメージ、トラウマ…などの勉強もしたいです。

とてもとてもよかったです。⇒何より「視点」が良かったです！！

また、ぜひ西澤先生の開いてください。

児相の方へ小児科医など多くの機関の方々にぜひきて学んでほしい！と思いました。

●子どもへの虐待の影響は、本などで知っていたけど、改めて勉強することができてよかった。私自身、注意欠陥多動障害や高機能自閉症の子について学んだり、関わっていて、少しは虐待などの不適切な環境も原因に入るのではないかと思っていたので、今回の講演会を聞いて、すっきりした気持ちになった。また、どうして虐待を受けた子は、暴力など自分がされたことを再現してしまうのだろうと思っていた。遊びを通じて、トラウマを克服しようとしているのを聞いて、なんとなく分かった気がしました。FSWのあり方についてFSWは子どもを支援するために使うものだと言うことを聞いて、今度の児童養護施設の実習のときに頭に残しておきたいと思いました。

●事例も含めた話でとても分かりやすく勉強になりました。ありがとうございました。とてもおもしろい講演ありがとうございました。虐待のケースはなかなか関わりにくい部分ではあると思いますが、子どもたちのために少しでも今日の講演の内容を役立てていきたいと思いました。

五つの訓示

広島保護観察所 福山駐在官事務所
保護観察官 今村嘉治

保護観察は、保護観察官と地域のボランティアである保護司が協働して実施していることは以前にお伝えしたところですが、保護司というボランティアは単に社会奉仕の精神だけでできるものではありません。

保護司の身分等を規定する「保護司法」第3条には、保護司は以下のすべての条件を具備することが明記されています。それは、

- ① 人格及び行動について、社会的信望を有すること。
- ② 職務の遂行に必要な熱意及び時間的余裕を有すること。
- ③ 生活が安定していること。
- ④ 健康で活動力を有すること。

とあり、当然ながら成年被後見人であることや禁錮以上の刑に処せられたことがあること等も欠格事項になります。つまり、(バイクで暴走しながら家庭訪問したりする素行不良の私は④しか具備できないわけで…) 保護司はとても崇高なボランティアであるということです。ちなみに、広島県内には約1,300人の保護司が委嘱されており、昼夜を問わず、保護観察対象者やその家族への支援、さらには地域の犯罪予防活動等に従事いただいております。

そのような人生の大先輩である保護司といっしょに仕事をさせていただく中で、先日、「保護司五訓」という言葉を拝聴しました。まさに保護司のあり方を記した素晴らしい訓示ですので、紹介したいと思います。

保護司五訓

- 一 焦らないこと。
- 一 諦めないこと。
- 一 待つこと。
- 一 耐えること。
- 一 祈ること。

この五訓は、保護観察対象者等とかかわるボランティアの保護司のみならず、福祉や教育、医療等に従事するすべての援助職に当てはまる訓示であると思います。特に、ソーシャルワークの援助過程においては、援助者が焦って我を忘れたり、援助そのものを諦めてしまったり、待てずに結論を急いでしまったりします。そして、援助者自身が耐え切れずにバーンアウトしてしまうこともよくあります。しかし、この五訓にあるように、ソーシャルワーカーとして自己覚知に基づいて粘り強くかかわり、目先の利益にとらわれずに大局を見定め、クライアントの自己実現を祈って実践していくことが大事なのではないでしょうか。

この素晴らしい五訓をいつも心に留めて、ソーシャルワークを実践したいものですが、言うは易し行うは難し、私は日々反省するばかりです。

ちなみに、私は最近釣りにハマっていますが、この五訓とはほど遠い状況にあります。みなさん、せめて祈ってください。

- 一 アタリがあると焦ってあわせてしまい、逃げられることばかり…。
- 一 ボウズ（魚が釣れないこと）の日は、諦めて帰りたくなります…。
- 一 とてものんびり待てません。釣れないとイライラが募ります…。
- 一 今日もまたボウズ、もう耐えられません…。（妻の小言にも）
- 一 せめて一匹でも釣れたらなあと祈るのみです…。

S・コラム

新メンバーとして

遊心工房 スタッフ 数野 幸子

昨年9月 S・コラボに入会しました。入会の規定や年会費があるので敬遠しており、講演会の当日に手伝いをするだけでした。尾崎新さんの講演会に触発されて活動が楽しそうだなと感じたのと、仕事に行き詰まっていた時期がちょうど重なりました。仕事にも慣れてこれからどうしていこうか、他の人はどうしているのか、もうちょっと知識が欲しいと思っていたので入会を決意し、他の勉強会にも参加することにしました。

仕事の後に S・コラボに参加することはしんどく、多大なるストレスがかかりますが、その分、自分がいつもつまづくことに気がついたり、自分の成長を実感することができ、飲み会に参加する機会も増えたので入会して良かったと思っています。これからも、どうぞよろしくお願いします。

60km の道のりの中で

福山友愛病院 訪問看護

PSW 堀内香奈

前回号でコラム「ブギウギムービー」を担当させていただきました、堀内香奈と申します。いきなりのコラムデビューで、真面目な文章を書いていなかったの今回書かせていただくことになりました。初めましてなので、私の仕事に少々触れますと資格としては精神保健福祉士（以下、PSW）なのですが、配属先は訪問看護です。PSWがなぜ訪問「看護」？と、私は配属当初疑問に思っていました。当院の訪問看護は看護師とPSWが2人1組で業務に当たっています。早い話がみる目が違うわけです。看護師は診る・PSWは視るとでもいいでしょうか。違う視点で物事を見ることによって互いが気づかなかった発見があるわけです。とは言え、PSWと名乗り2年が終わったばかりの少々デカイヒヨッコとベテランスでは発見に差が出てくるわけですし、少しでも自分に知識と幅を持たせるためにS・コラポに入会させていただきました。

話は変わって、私は20歳でPSWになるべく実習を受けました。実習先は北海道浦河町にある浦河赤十字病院です。知ってる人は知っている。べてるの家のメンバーさんが通院する病院で、バイザーは福山にも2度来られた高田大志さんです。私は当時大学3年生で、私を含め最高5人の実習生を高田さんは抱えていました。私以外は皆4年生で、質問の内容や質が違うと勝手に思い込んでいた私はなかなか聞きたいことが聞けず実習が経過していました。浦河には「公私混合大歓迎」という言葉があります。その言葉通り高田さんは公私共に日曜日までメンバーさんと一緒にいろんな活動をしていました。疲れないのかな？というのが私の本音で、ある日その疑問をぶつけてみました。たぶん誰からも促されることなく私から質問をした最初の日でした。私の初めての質問に対して高田さんは笑いながら「自分の仕事を楽にするためだよ」と答えてくれました。続けて高田さんは「その人の調子がよい時こそ関わっていれば、もし調子を崩しても戻る位置を知っている。一緒にあそこ（調子がよい時）まで戻ろうと言えし援助もできるけど、調子を崩した状態で初めて会ってもどこに戻ればいいのかわからない。だから調子がよい時こそ関わっていれば後あと楽なんだ」と言われました。私の質問に率直に答えてくれたことに嬉しさを感じていましたが・・・正直、当時の私は高田さんの意図するところがわかっていなかったように思います。今ももしかしたらわかっていないのかもしれませんが。ただ、訪問看護に配属されている今、その時の言葉を思い出すことがあります。

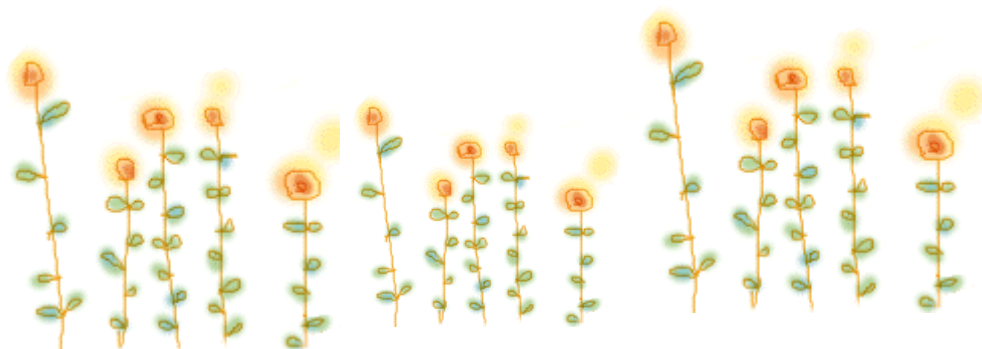
病棟勤務の時は感じなかったことですが、訪問看護に配属され1年を経過し病院と在宅では利用者の顔が違うと思いはじめました。症状の揺れが落ちついてい

る状態で在宅生活をされている方は皆、よい表情をして雰囲気がまるいのです。なに当たり前なことを言っているのかと思われるでしょうが、病棟で症状を崩している方々とだけ会っていた私にとっては目から鱗の出来事なのです。入院中に担当していたPSWとその後の在宅で生活している様子の話をすると、同じ人の話をしているのにイメージが食い違うということが多々あります。もちろん、症状の良し悪し双方の状態を知っていることが理想なのでしょう。だからこそ高田さんの

「その人の調子がよい時こそ関わっていれば、もし調子を崩しても戻る位置を知っている。一緒にあそこ（調子がよい時）まで戻ろうと言えるし援助もできるけど、調子を崩した状態で初めて会ってもどこに戻ればいいのかわからない。だから調子がよい時こそ関わっていれば後あと楽なんだ」

という言葉の思い出し重みを感じます。この言葉はよい時も悪い時も両方知っている、または知ろうとしている人の発言だと思うからです。

タイトルに掲げた『60kmの道のり』は業務中の私の移動距離です。一日平均60km、福山市内をグルグル回り利用者の家を「訪問」しています。移動当初は訪問「看護」に違和感がありましたが、今では「訪問」看護として訪問することの意義を感じています。福山友愛病院には私以外にもPSWは在籍していますが、「訪問」看護専属のPSWは2人！アウトリーチ専門の貴重な2枠の内1人が私であることに嬉しさと申し訳なさを感じます。ただ訪問をするのではなく、利用者に「一緒にあそこ（調子がよい時）まで戻ろうよ」と言える関係を目指し腰痛や運転中の睡魔にも耐え訪問をしていきたいと思えます。そして、自身のさらなる成長を促すためにも、恩師である高田さんに少しでも近づくためにもSコラボを通じていろんな人と出会っていききたいと思えます。こんなデカイヒョッコですがどうぞよろしくお願ひします。



私の日々

遊心工房スタッフ 守屋智加

はじめまして。この4月から遊心工房のスタッフとなりました、守屋智加です。智加と書いて「さとか」と読みますが、遊心では守屋の「も」を取って「もっちゃん」と呼ばれています。

岡山の川崎医療福祉大学を卒業し、遊心で働き始めて早1ヶ月、眠い目をこすりながら電車通勤に励んでいる日々です。今まで、電車通学もしたことなかった私が、最後の最後で電車通勤をすることになるとは思いませんでした。朝のホームで電車を待っている自分に違和感があるのは当然で、たまに「これから自分はどこに行くのか」という気さえしてしまう程、学生気分の抜け切らない今日この頃です。その一方で、就寝時間は日により違っていても、定時に起き出勤するという社会人としての生活がこんなにも大変だとは思いませんでした。しかし、学生の生活を恋しく思う中にも嬉しい発見がありました。思う存分寝てやろうと思っていた休日に定時に目が覚め悔しい思いをしましたが、「午前と午後のある1日はこんなにも沢山の事が出来るんだ！」という発見をし、何だかその日は有意義に1日を過ごした気分になりました。とは言っても、やっぱり休日は思う存分寝ることが幸せですが・・・

さて、このような日々を送る私の遊心での生活はというと、先輩方やメンバーさんに励まされ、勇気付けられている毎日です。作業を黙々としている私に「無理をしないで」と声をかけてくださるメンバーさん、長々とまとまりのない話を「うん、うん」と聞いてくださる先輩方、メンバーさんや先輩方と笑い合える時間など、私にとっては全てが初めてで、全てが新鮮に思えます。また、遊心で過ごす日々の中で私は、「私は私のペースでいい」ということを教えていただきました。遊心はとても自由な空間で、時にその自由さをどのように使ったらいいのか分からない時もあります。自由であるが故に悩むこともあります。そのような時はメンバーさんの過ごし方からヒントを貰います。遊心にいると忘れがちな「人には人のペースがある」ということに気づかされます。この当たり前だけど、当たり前でないことが言葉となって伝えられていることに、温もりを感じます。私はこれから遊心工房のスタッフではあるけれど、一メンバーとして同じ時間を過ごしていきたいです。1ヶ月が経った今、「もっちゃん」と言われただけで嬉しく思います。そして何よりも、皆さんと何気ない会話が出来ることが一番嬉しいです。まだ何も特別な事が出来るような私ではありませんが、遊心では笑顔を忘れずにいたいと思います。これからもよろしくお願いします。

安心で安全な人・居場所

自由館スタッフ 重原直子

最近、『「愛されたい」を拒絶される子どもたち』（椎名篤子著 大和書房）を読んでいます。この本には、虐待に関して日本で先駆的な取り組みをしている施設を著者が取材し、虐待ケアの現場の事例をもとに綴ってあります。単なる事例レポートではなく、専門的な解釈や理論が現場のスタッフたちのやりとりの中で随所に出てきます。私自身、今関わっている子どもたちとどう向き合い、どう理解していけばいいのかを本書の事例と照らし合わせて読みながらヒントをもらったりしています。

本書を読む中で、そして最近強く思うことは、虐待を受けた子どもたちにとって安心して安全に過ごせる人や居場所がまず必要だということです。自由館に勤め始めた頃は、否定、批判、強制、コントロールをしない関わりをするように言われましたがそれが何を意味しているのか・・・漠然とした中で関わっていました。

本書にこのような行があります。

「子どもの気持ちに関係なく、勝手に世話をしたり放置したりすれば、子どもからは親密な関係を作れないんだ。・・・支配せず受容していくことだろうと思うけれど」

これは、虐待児を乳児期から預かるグループホームの保育士が、大人を信頼し始め、虐待の症状（周囲が受け入れ難い行動）が出始めた子どもたちに悩む葛藤場面の言葉です。そして、

「（ぼくの心の中には解決しなければ大人になれない問題があるんだ）」拓巳の行動はそう言っているように見えた。

とあります。

本書では、それらを保育士や子どもたちが乗り越えながら様々な変化や成長をする姿が綴られています。

「安心、安全な居場所があり、そこには自分を受け入れてくれる誰かがいる」・・・年単位で関わる中で、そのような環境や体験があってこそ回復のための次のステップがあるということ、変化していく子どもたちを目の当たりにしその重要性は私の中で漠然としたものが確実なものになってきました。

何らかの支援が必要な子どもたちと関わる中、私自身、援助者として乗り越えなければならない課題はたくさんありますが、出会う子どもたちと一緒に成長していきたいと思います。

虐待とネグレクト

NPO 法人家族サポートネットワーク広島 理事長
自由館 代表
就労支援施設 なないろ 施設長
精神障害者小規模作業所 遊心工房 所長
福井一仁

人間は怒りや不安を感じると感情を司る脳(大脳辺縁系)の中にある扁桃体が興奮し、緊張ホルモンが分泌されます。虐待とネグレクト(放置)を受けている子どもたちは、この緊張ホルモンの放出が頻繁に、あるいは長く続いている状態にあります。感情を司る脳が活発に動きそれに反応して行動を起こすことで、往々にしてそれが周囲の人たちを困らせることとなります。つまり、これらの子どもたちは、感情を司る脳を自制する思考を司る脳(前頭前野)が育っていないということになります。

不当に扱われた子どもたちの中でも、ネグレクト(放置)を受けた子どもの脳は正常児の30%も小さく、他人の感情を理解する部分が育っていないといわれています。いわゆる親(または養育者)との愛情の相互交換がなされず、共感や同情する気持ちが育っていないのです。一般にネグレクト(放置)された人は「冷たい人間」と言われる所以がここにあります。では、虐待(身体的虐待、精神的虐待、性的虐待)の場合はというと、親(または養育者)との否定的関係ではあっても相互に交換があることで思考を司る脳がネグレクト(放置)を受けた子どもよりは育っています。しかし、どちらにしても虐待とネグレクト(放置)を受けた子どもたちは、脳が怒りや不安にばかり反応するように育てられ、お手本としての親(または養育者)の行動を学び、それを自分の中に取り入れる機会がなかった子どもたちと言えるでしょう。その結果、人を傷つけても良心の呵責が無い子どもに育ってしまうのです。これは、「インナーチャイルドの癒し」を学べなかった子どもたちとも言えます。親(または養育者)が子どもに安心感を与える行動で緊張ホルモンの分泌は抑えられ、それが繰り返されることによって親(または養育者)がいなくても怒りや不安を自分でコントロールでき、自分で自分を癒すことができるようになるのです。これが、自分の中の子ども(インナーチャイルド)を自分が癒してあげられる能力なのです。虐待とネグレクト(放置)を受けた子どもたちは、一度泣き出したらなかなか泣きやみません。これは自分で自分を癒すことを学べず、いつまでも怒りと不安の渦の中で苦しみがいているという状態なのです。

しかし、虐待された子どもたちは親(または養育者)との否定的関係をつなぎとめようとする行動を本能的に取ります。親(または養育者)との関係は常に怒りと不安を伴うものであるけれども、それが愛情の相互交換だと誤って学習し、それ

を引き出す行動を取ってしまいます。例えば、わざとコップの水をひっくり返し親が叩くかどうか試すような行動をしてしまいます。子どもにとって、否定的関係でも相互交換(問題ある行動を起こす→叩かれる)をしているほうが、そこに親(または養育者)との関係が生じ、「ああ、自分は生きているんだ」と実感できるのです。

虐待とネグレクト(放置)の治療は、その子どもが「愛されるに値する自分」を築き上げることによって回復していきます。悪いことをして、「試し行動」を繰り返してもそれが受け入れられることにより、自分自身を肯定できるようになっていきます。そして、生きるための新しい技術を習得することによって、ストレスに対する耐性も出来上がり、怒りや不安は小さくなり、幸せに生きることができるようになるのです。虐待やネグレクト(放置)をされた子どもたちに対して、否定せず全てを受け入れる人と場所の確保が最も重要な回復への基本的条件ということになります。



私の電車日記

電車通勤のもっちゃんが今日もこっそり観察…。

人生で初めての電車通勤をしている私ですが、電車という所は色んな声が聞こえてきますね。

4月に入ってまだ間もない頃の朝、うつらうつらしていた私の耳に「あ〜・・・もうマジ嫌なんだけど〜」という女子高生の声が入ってきました。この睡眠を妨げるかのようなキャピキャピした声にうんざりしながら、「何が嫌なんだろう」と思い聞き耳を立てました。するとその女子高生、「あ〜マジ嫌なんだけど、クラス替え」と一言。テストとかそんなことを嫌がっているのかと思いきや、「クラス替え」という拍子抜けな回答に「何だ、そんなことか!」と笑ってしまいました。でも、昔の自分を思い返して同じことでギャアギャア言っていたな・・・と思うと、その若さを羨ましくも思いました。それにプラスして、いつの間にか歳をとってしまったのか・・・と若干22歳の私でさえも歳を取った気がしました。笑

でも、「女子高生ってこんなことで悩むんだな」と、社会人になった自分がほんのちよっぴり大人になったような気もしました♪

ところで皆さん、世間では女子高生のことを「JK」と呼ぶことを知っていましたか???(・_・)笑

(守屋智加)



ウギウギ ムービー

メンバーのオススメ映画をご紹介します。



題名：『チェンジリング』（2008）

監督：クリント・イーストウッド

主演：アンジェリーナ・ジョリー

ナビゲーター：堀内香奈

1920年にロサンゼルスで実際に発生したゴードン・ノースコットによるウィネビラ養鶏場殺人事件の被害者家族の実話を元に映画化。なお、題名は「取り替えの子」という自分の子どもが醜い子どもに取り替えられるというヨーロッパの伝承に基づく。ストーリーは、1928年のロサンゼルス。シングルマザーである電話会社に勤務するクリスティン（アンジェリーナ・ジョリー）の息子ウォルターが姿を消す。警察に調査を依頼し、その5か月後、警察からウォルターを保護したと朗報は入る。クリスティンは再会を果たしたが、ウォルターはよく似た別人だった。警察にそのことを主張すると彼女は精神異常者として精神病院に収容されてしまった。この事件の背後には当時のロサンゼルス市警察の恐るべき体質が隠されていた。

（引用：BIGLOBE 百科事典）

『チェンジリング』を見ました。「見てよかった」というのが素直な感想です。

ハッピーエンドではなかったものの1928年にロサンゼルスで起こった本当の事件を監督クリント・イーストウッド、息子を想う母親役には唇が印象的なアンジェリーナ・ジョリーが見事に再現していました。

ある日突然息子が姿を消し、五ヶ月後に発見され警察に連れてこられた男の子が別人だったときの戸惑う場面や、男の子は自分の息子ではなく人違いだと警察に訴えるシーンは、いつものアンジェリーナ・ジョリーとは違って新鮮でした。息子に会うまでは決して諦めないと奮闘する母親役が見事にマッチしていました。

帰って来た子どもが人違いだと訴え続けた母親は、警察の陰謀で精神科に強制入院させられてしまいます。ノンフィクションの話とはいえ、この話は1920代のこと。映画の中の精神科の風景は現在の精神科とは違い「ザ・閉鎖」の言葉が映画鑑賞中に私の頭の中に出てきたのを覚えています。

最後に息子が生存している可能性を掴んだ母親は「hope」希望を見出したと言って映画は終わりますが、その言い方や雰囲気 genuinely 希望にあふれたものでした。いつかこんな母親になれたらいいなと思いました。



「絆ホルモン（オキシトシン）」ぐんぐん上昇！！



今回は、絆についてのお話です。

愛犬と見つめ合うと、相手への信頼感や絆を強める働きのあるホルモンが飼い主の体内で増加することを、麻布大と自治医大の研究グループが今年1月24日までに確認したとのことでした。

このホルモンは「オキシトシン」と呼ばれ、ほ乳類の母子関係や夫婦の絆形成に関係しているとされるが、異種間での作用が確かめられたのは初めてという。「見つめる」ことがオキシトシン増加を招くことについて永沢美保・麻布大学助教は「『目は口ほどに物を言う』と言われるが、人間と犬の間でも視線が重要なのだろう」と話している。

研究は55組の飼い犬と飼い主で実験。室内で1組ずつ30分間ふれ合ってもらい、飼い主の尿に含まれるオキシトシンの濃度を実験の前後で比較した。すると事前のアンケートで犬との関係が「良好」と判断された飼い主13人では実験後に濃度が大きく上昇。「普通」の42人は変化がなかった。良好群の実験を撮影した映像を分析すると、犬が「遊ぼうよ」と飼い主を見つめたのをきっかけに交流した回数が多いほど、実験後の濃度が高くなっていた。

一方、犬に顔を見せないよう飼い主が壁を向いたままふれ合う実験では、55組全てで濃度変化は表れなかった

◆オキシトシン◆

ホルモンの一種。人間では脳の視床下部などで作られ、母乳を分泌させたり、出産時に子宮を収縮させたりする働きがある。分泌や作用を妨げられたマウスは、授乳や子育てできなくなることが確かめられている。人間でも、投資ゲーム参加者の鼻に噴霧したところ、相手を信頼して、より高額な投資をするようになったとの研究結果が報告されている。（2ちゃんねる 科学ニュースより引用）

ふむふむ、なんとも興味深い話です。私たち「ほ乳類」にとっては、とても大切なホルモンのようですね。上記の引用文の中で印象的なのが、全飼い主が壁を向いて相手をしたのでは濃度変化が見られなかったとのこと。やはり、目を見て接するということが、こちらにも向こうにも向き合う意思があることが大事なのだなと思いました。しかし、現実、うちの2匹の犬たちに向き合うのが面倒くさいこともしばしば…ごめんね、ぼんちゃん、銀くん……。 (**ぼんず**と**銀**は自由館・遊心工房の看板犬です！！)

(重原直子)



『砂の城』

著者：一条ゆかり

(りぼん 1977年7月号から1981年12月号掲載)

この作品を読むきっかけになったのは10年くらい前に「砂の城」が昼ドラで放送されていたことです。その頃ちょうど学生時代で昼間が暇だったので初めて昼ドラをみて、面白いストーリーだなと思い原作を買って読みました。原作は一条ゆかり。小学生の頃に「りぼん」を愛読していて、「有閑倶楽部」が好きでした。これもドラマ化されていましたね。他の作品には「デザイナー」「こいきな奴ら」「女ともだち」があります。

原作の舞台はフランスなのですが、ドラマでは舞台が日本で、主人公の職業なども変えてあり大部分が脚色されていました。ドラマはそれなりに面白かったのですが、やっぱり原作にはかないませんね。

1番最初に読んだときは、主人公ナタリーの人生は思うようにいきかけてもダメになってしまうことが多くてかわいそう、とかフランス(ナタリーの恋人)、他の女にいい顔せずに、しっかりしろよ。と突っ込みつつ面白く読めました。主人公が不安発作を起こしたり、登場人物に精神科医や精神科病棟がでてくるので精神保健福祉分野の勉強をしたのちに読むと、最初に読んだときと違った思いがでてきます。自分なりに登場人物の性格を分析しながら読んでみたりと何度も読んであれこれ考えてしまいます。Happy Endではないので、読み終わると切ない気持ちになります。

余談ですが、集英社のコミック文庫全4巻を買ったのですが、妹も同じ物を買っていて家には「砂の城」が2組ありました。なので1組は遊心工房に置いてあります。
(数野幸子)



フォークソングのススメ



前回の「コミックノ ススメ」で、20世紀少年との関係で遠藤 賢司（エンケン）さんのことも書きました。まあ、その続きですが、おつきあいでください。

今回は、お亡くなりになった忌野 清志郎さんを偲び、忌野さんがらみの内容です（あんまり絡んでないけど）。忌野さんといっても、周りまわってつながっているという感じなのです。

この回りまわったつながりは、古井戸（ふるいど）というフォークグループが始まりです。私は古井戸が好きだったのです。中学時代の深夜放送がきっかけですね。

古井戸は、加奈崎 芳太郎（かなざき よしたろう）と仲井戸 麗市（なかいど れいち）のフォーク・デュオです。加奈崎さんの歌と、仲井戸（チャボ）の叙情的な世界が魅力でした。シングル「さなえちゃん」がヒットしました。多くの方は、「さなえちゃん」をご存じでしょう。歌詞は次の通りです。

さなえちゃん 作詞/作曲 仲井戸麗市 1972年（昭和47年）

大学ノートの裏表紙に さなえちゃんを描いたの
一日中かかって 一生懸命描いたの
でも鉛筆で書いたから いつのまにか消えたの
大学ノートの裏表紙の さなえちゃんが消えたの
もう会えないの もう会えないの 二度と会えないの

大学ノートの3ページに ケメ君を描いたの
一日中かかって一生懸命描いたの
でもあんまり可愛いから 憎らしいから消したの
大学ノートの3ページの ケメ君も消えたの
もう会えないの もう会えないの 二度と会えないの

大学ノートの隅っこに 金崎さんを描いたの
ほんとは嫌だけど あとが恐いから描いたの
大学ノートの隅っこの 金崎さんが消えたの
もう会えないの もう会えないの 二度と会えないの

大学ノートのおもて表紙に ボクを描いたの
一日中かかって一生懸命描いたの
あんまり素敵だから 消すのはもったいないの
大学ノートのおもて表紙に

ボクは消えないの ぜったい消えないの
ぜったい消えないの ぜったい消えないの

大学ノートの裏表紙に さなえちゃんを描いたの
一日中かかって 一生懸命描いたの
でも鉛筆で書いたから いつのまにか消えたの
大学ノートの裏表紙の さなえちゃんが消えたの
もう会えないの もう会えないの 二度と会えないの

さなえちゃん、を自分の好きな人の名前（〇〇ちゃん）に代えて歌うのが流行っていたのですよ。

さて、ちょっと脱線します。この歌詞に出てくるケメ君とは、佐藤公彦さんのことです。「通りゃんせ」という歌が有名です。このケメ君とよしだよしこさんがピピ&コットというバンドを組んでいて、泉谷しげるのデビューアルバム『泉谷しげるの登場』（1971年）のバックバンドをしていたのです。

また、金崎さんは、加奈崎さんのことでしょうかね。



さて、古井戸ですが、私は「コーヒーサイフォン」という歌がとても好きで、よく歌っておりました。叙情的な感じで、よかったです。写真のアルバム『ぼえじー』の中に入ってる曲です。

なかなか、忌野さんにたどり着きませんが、お許しを。

古井戸の仲井戸さんは、1977年に破廉ケンチ（はれんけんち）さんがRCサクセションを脱退後空席となったリードギタリストとしてRCサクセションに正式加入しているのです。ふ～。ようやく、RCサクセションにつながりましたね。

ということで、忌野清志郎さんがお亡くなりになった時に、泉谷しげるさんが出てきていますが、1970年代からのおつきあいですから、それは無念だったのだと思います。

ちなみに、私が初めて行ったコンサートは、泉谷しげるさんのコンサートで、今はなくなっていますが、京都会館第一ホールという会場でした。（長崎和則）



ウギウギ ムービー2



題名：『デトロイト・メタル・シティ』（2008）

監督：李闘士男

主演：松山ケンイチ

ナビゲーター：豊田尚子

渋谷系ポップソングミュージシャンを目指して上京した根岸くんが入った音楽事務所は、悪魔系デスメタルバンドのメンバーを募集していた。白塗りメイクで額には『殺』の文字。自分の望まないスタイルで「ヨハネ・クラウザーⅡ世」と名乗り、“デトロイトメタルシティー（略して「DMC」）”というバンドのギターボーカルとなる。こんなの僕のやりたい音楽じゃない！」と心の中で叫びながらも、次第にバンドは売れていく。メイクを落とすと、いつもの気弱で軟弱な男の子にもどり、ストリートで大好きな渋谷系ポップソングを歌うが、そちらは一向に芽がでないまま。

そんな折、学生時代に同じサークルだったあこがれの女性である相川さんと再会する。DMCのボーカルであることを隠しているが、だんだんと嘘がほころびそうになっていく。そんな折、アメリカのデスメタルの大御所が、引退記念に各国をツアーでまわり、デスメタルバンドと競演する。つまりは潰しにかかるとの話。日本ではDMCが指名されて…

このようなタイプの映画をみることのない私が、なぜ、これを見たのか？それは予告編のおもしろさにひかれたからでした。実際に見に行ったときは、客の入りも少なく、笑うところで、笑えないというさむ〜い思いをして、なんだかなーという気分で帰ったのですが、DVDでもう一度みたときには、もっと面白かったです。

人は誰もいろいろな顔を持っています。善人と悪人、表と裏というように、相反するものを一人の人間が抱えている。そういうものをどこかで見たい知りたいと思うのは私だけ？恐らく、多くの方が似たような気持ちを持っているのでは？

この映画では、まさに軟弱を絵にかいたような根岸君がクラウザーⅡ世となると、別人になる。けれど、クラウザーの格好をしながらも、ときに普段の自分が表れて、外見と内面のアンバランスさが見る者の笑いを誘う。そんな映画でした。いつか原作の漫画も読んでみたいものだと思います。

キャスティング的には、音楽事務所の社長役の松雪泰子がハマリ役でした。ここまでやるのか！と感心しました。多くの方がそう思ってくれるはず。

笑えて、少しほのぼのとして、またデスメタルの世界も少し味わえる。一粒で何度もおいしい感じかも。私的にはやはりデスメタルは苦手だけど、クラウザーのようないでたちのミュージシャンの心の中って意外とこんなだったりして・・・と思えば、また、それはそれで、楽しめます。

おじさんの青春シリーズ ロック魂 vol.1

ロックについて熱く語らせていただきます。
すみません…シリーズでお付き合い下さい！！

私がハードロックをはじめて耳にしたのは1970年の初頭、私が中学の時でした。レッドツェッペリンというイギリスのハードロックバンドの『移民の歌』が私のハードロック人生に火をつけたのでした。その時の衝撃—鳥肌が立ち、手足が震えたことは今でも忘れることはありません。私のハードロック人生はレッドツェッペリンにはじまり、レッドツェッペリンに終わるといっても過言ではありません。私の葬儀にもっくんの「おくりびと」に送ってもらうよりも、レッドツェッペリンの『天国への階段』で送ってもらいたいと思うほどです。

レッドツェッペリンは、1968年9月に結成し、1980年12月にドラムのジョン ボーナム(ボンゾー)の自動車事故による死で解散しました。ボンゾーはアルコール依存症で有名ですが、事故当日も飲酒し、大変なスピードでまさしく天国への階段を昇っていきました。

レッドツェッペリンは12年間というバンド生命でしたが、メンバーはデビュー当時から変わることなく、解散まで続きました。ギターのジミー ペイジは、エリック クラプトン、ジェフ ベック、リッチー ブラックモア、キース リチャーズなどの世界的なギタリストの中に名を連ねていますが、ギターの演奏技術は一番ヘタ(かな?)。しかし、ジミー ペイジが一番プロデュースの才能があり、12年間のバンド活動の中で、自分のやりたいことをやり続けたと言っていると思います。

レッドツェッペリンは、1971年に完璧なアルバム『ツェッペリンIV』を発表し、ロック界の頂点に立ちました。その後9年間主役の座に君臨し続けました。世のツェッペリンファンもそうですが、私も、このバンドを超えるバンドは未だに世に出てきていないと思っています。レッドツェッペリンの1枚目のアルバム発表時と同時期、ビートルズのジョン レノンが『イマジン』を発表しましたが、その頃はまだまだビートルズの影響は大きいものがありました。しかし、1969年『ツェッペリンII』が発表されると、ビートルズが発表した『アビーロード』を抜き、ランキングトップに躍り出ました。そして、前述した『ツェッペリンIV』で他のどのバンドも寄せ付けないすごさを全世界にアピールしました。私はビートルズの全盛期に生まれましたが、団塊の世代のようなビートルズファンではありません。ビートルズは何か物足りない、これがロックか?これは歌謡曲に毛の生えたポップミュージックだろう(ビートルズファンの方には大変申し訳ない…)と密かに思っていたところにレッドツェッペリンと遭遇したのでした。それまでのへなちょこ音楽に辟易し、フラストレーションがピークに達していたまさにその時、私の中に神の降臨のようにレッドツェッペリンは現れたのでした。つづく

(福井一仁)



子ども虐待 という第四の発達障害

発達障害は、子どもの発達途上において、何らかの理由によって、社会的な適応上の問題を引き起こす可能性がある凸凹を生じたものです。そのなかには、子ども虐待など生育環境による発達障害もあると考えられます。子ども虐待と発達障害について一緒に学びませんか。

日 程 : 2009年8月2日(日)
午後14時30分～16時30分〔14時00分開場〕

講 師 : 杉山 登志郎(すぎやま としろう)さん
(あいち小児保健医療総合センターの心療科部長兼保健センター長)

場 所 : 福山市男女共同参画センター(イコールふくやま)
福山市西町1番1号 福山ロッツ地下2階

参加費 : 1,000円(当日受付でお支払いください)

後 援 : 福山市教育委員会、広島県精神保健福祉士協会

杉山 登志郎(すぎやま としろう)さんのプロフィール

◇日本における高機能自閉症やアスペルガー症候群の権威の一人。最近では子ども虐待にも関心を持つ。久留米大学医学部卒業。

同大学卒業後、久留米大学医学部小児科学教室、名古屋大学医学部精神医学教室に入局。その後、静岡県立病院養心荘、愛知県心身障害者コロニー中央病院精神科医長を務め、カリフォルニア大学ロサンゼルス校神経精神医学研究所に留学した。そして、名古屋大学医学部精神科助手を経て、静岡大学教育学部教授、名古屋大学医学部非常勤講師に至り、2001年から現職

◆主な著書『発達障害の子どもたち』,現代新書,2007. 12

『発達障害の豊かな世界』,日本評論社

『子ども虐待という第四の発達障害』,学習研究社

『アスペルガー症候群と高機能自閉症』,学習研究社

杉山 登志郎氏 書籍紹介



『子ども虐待という第四の発達障害』

杉山 登志郎【著】 学習研究社 (2007/05/07 出版)

虐待された子どもたちは心だけでなく、脳の発達にも障害が生じるといふ。そのために例えば自閉症児と極めて似た症状や問題行動に苦しむ子どももいる。著者は多くの重篤な被虐待児の治療にかかわる中、このような精神医学的知見に達した。これは子ども虐待と発達障害の関係を探るといふ今日的な緊急課題でもある。

この分野の世界的な研究者で臨床医である杉山登志郎先生が臨床例や研究から分かりやすく紹介する。(紀伊國屋書店BOOKWEBより引用)



『発達障害の子どもたち』

杉山 登志郎【著】 講談社 (2007/12/20 出版)

言葉が幼い、落ち着きがない、情緒が不安定。

そだちの遅れが見られる子に、どのように治療や養護を進めるか。

長年にわたって子どもと向き合ってきた第一人者がやさしく教える。

(紀伊國屋書店BOOKWEBより引用)



『アスペルガー症候群と高機能自閉症 青年期の社会性のため』

杉山登志郎 / 学習研究社 (2005/03 出版)

アスペルガー症候群、高機能自閉症と呼ばれる人々はかつてほとんど知られることがなかったが、社会に出てから通常の人々とのコミュニケーションの困難から様々な問題を起こしたり、社会性が身につかず社会人として生きにくい現状がある。そこで少年期からの社会性獲得のための実践的な支援を集めた。知的な遅れがなく、言語のある自閉症の人々、アスペルガー症候群、高機能自閉症と呼ばれる人々はかつて殆ど知られることがなかったが、社会に出てから通常の人とのコミュニケーションの困難から様々な問題があった。彼らへの理解と実践的な支援を集めた本。(紀伊國屋書店BOOKWEBより引用)



ご あ い さ つ

豊田 尚子

今年度も代表を務めさせていただくこととなりました。豊田です。昨年度、1年間代表をさせていただきましたが、至らないところも多く、みなさんに助けをいただきながら、1年が過ぎたように思います。今年も私でいいの？という思いもありますが、この1年もみなさんの力を借りながらやっていこうと思います。どうぞ、よろしく申し上げます。

昨年度は月2回の定例会に加えて、尾崎新先生と西澤哲先生の講演会も実施しました。両先生ともお忙しい中、福山までお運びくださり、大変内容の濃い講演をしていただき、本当にありがたいことだったと思っています。

今年度は、昨年度の経験を活かしながら、より充実した活動をしていきたいと考えていた矢先、なんと！杉山先生が来てくださることになり、大変喜んでおります。多くの方に先生のお話を聞いていただきたいものだと思っています。

さて、私事になりますが、この5月に、久しぶりの入院生活をしました。昨年、一昨年と家族の看病で病院と縁が切れませんでした。今度は私自身が患者となって入院することになりました。といっても、期間は4日程度の治療入院でした。けれど、その短い入院生活でも、看病していたときには気づかなかったことがいくつもありました。患者の視点にたつと、こんなことをしてもらいたいのかとか、こんな気持ちになるのかといったことが見えてきて、考えさせられることもありました。

イマジネーションの乏しい私にとっては、実際に体験しなければ、なかなか他者の世界を理解したり、受け止めることができないことがあります。それをほんの少しでも知ることができたように思います。また、私がこの4日間で最も印象に残ったことは、同室で過ごした方たちの明るさと強さです。それぞれの方にそれぞれの闘病体験があり、一口では語れない思いを持っておられるのではないかと推察するのですが、それでも明るく冗談を言い合い、互いに助け合う姿をみると、どんなときにも、私たちにはできることがあるのだということを感じました。

「『今、私にできることは何か？』と絶えず自分に問うことが大切だ」という言葉を、ある方から聞いたときは、大変、納得もし、自分自身が元気になれるように感じていましたが、心に余裕を失い、受け身になって生きていたときには、すっかり忘れていました。職業柄などという狭い意味ではなく、社会に生きる一人の人間として、改めて、この言葉を自分に問い続けていこうと思います。

そういうことに気づかせてくれた入院生活は、体だけでなく、心も癒してくれた時間だったのだということに感謝したい気持ちです。



S・コラボ 今後の予定

事例検討を中心に、毎月第2、4月曜日の19時から自由館内で活動を行っています。

6月 8日	会合
22日	事例検討
7月 13日	会合
27日	事例検討
8月 2日	杉山登志郎氏 講演会
10日	会合
24日	事例検討
9月 14日	会合
28日	事例検討
10月 26日	事例検討
11月 9日	会合
14日・15日	S S T 研修会（予定）
12月 14日	会合
1月 25日	事例検討
2月 8日	会合
22日	事例検討
3月 8日	会合
29日	事例検討

編集後記

今回も充実した楽しい内容になりました！！
次回は、杉山先生の講演会報告ができればいいな♪と考えています。
今後も、読みごたえのある内容になるよう企画編集していきたいと思
いますのでどうぞよろしくお願ひします！！（重原）

S・コラボ会員募集!!

随時募集中です!! 興味のある方は下記までご連絡ください。

参加者種別	会員証	認定証	事例検討	相談 業務	研修参加 (割引有無)	会合 出席	年会費
正会員 ソーシャルワーク業務を行っており(精神保健福祉士または社会福祉士資格取得者が望ましい)、独立した業務を委託することのできる者	○	○	○ (3分の2以上の出席)	○	○ (有・半額)	○	・一括払い (1割引) →27,000円 ・4ヶ月ごとの3回払い →30,000円
準会員 ・ソーシャルワーク業務を行っているが、業務の委託をできない者 ・正会員の資格を取得するために養成施設に在籍している者 ・資格は持っていないがソーシャルワーク業務を行っている者	○	○	○ (参加可能)	—	○ (有・半額)	○	
一般 研修を受けようとする者、S・コラボに入会希望の者	—	—	○ 参加費 5,000円/回 (但し学生は1,000円)	—	○ (無)	—	—

ソーシャルワーカー・コラボレーションセンター

〒720-0044

福山市笠岡町 2-1 スガヘイビル 2階自由館・遊心工房内

TEL/FAX: 084-921-2322

e-mail: scc@socialwork-jp.com

(HP) http://www.socialwork-jp.com/scc/scc_top.html

代表世話人 豊田尚子